

Y17a 戦前の緯度観測所に勤務した或る女性所員の生涯

馬場幸栄（一橋大学）

国立天文台の前身組織のひとつである緯度観測所（岩手県水沢）は大正12年より女性を雇用していた。彼女たちはどのような経緯で緯度観測所に就職し、どのような業務を担当し、退職後にどのような人生を歩んだのだろうか。これまで天文学史において殆ど注目されてこなかった女性所員たちの実像を明らかにするため、戦前の緯度観測所に勤務した或る女性の生涯をご遺族への聴取調査、ご遺品、緯度観測所の写真・文献から紐解いてゆく。

タミ子は大正7年に水沢で荷車を製造販売する商家・飯坂家の二女として生まれた。水沢の尋常小学校と尋常高等小学校に進学したタミ子は成績も良く、学校で表彰された。昭和7年春に緯度観測所所長・木村栄が「給仕」1名の推薦を同校に求めると校長はタミ子を推薦した。14歳で緯度観測所所員となったタミ子の配属先は「庶務課」だった。日給制で、お茶汲みなどの雑用から始めた。しかし、同じく尋常高等小学校卒ながらも数学者となることを目指し勉強を続けていた所員・石川栄助に触発され、タミ子も働きながら勉強を続けた。昭和8年には専門学校入学者試験検定の数学科と地理科に合格した。昭和9年には「緯度観測所計算事務助手」となり、月給を貰えるようになった。計算を間違えたことがなかったため同僚たちからは「計算の神様」と呼ばれた。昭和12年には「臨時雇」に昇格し、「気象課高層気象掛」での勤務を命じられた。そこでも計算が主な業務だった。昭和15年、22歳となったタミ子は緯度観測所を退職し、見合いをして水沢出身の軍人を婿養子に迎えた。まもなく夫は農林省に移り、タミ子は家事と育児に専念した。3人の子どものうち、長男と二女は教員となり、長女は教育委員会や検察庁に勤めた。タミ子は緯度観測所に勤務したことを生涯誇りとし、子どもたちによく当時の話をした。所長・木村栄や所員たちがタミ子に贈った書・絵画・辞典・手紙等は今も子どもたちが大切に保管している。